

講演① 日本と韓国の両生類

川上洋一(トウキョウサンショウウオ研究会)

ユーラシア大陸の半島である韓国と、海によって隔離されたように見える日本との両生類相は、共通種の存在だけではなく、実際は非常に深い関係にある。

相違点から見ると、日本はトカラ構造海峡(渡瀬線)以南が、世界の動物地理区のなかで東南アジア・インド系の要素をもつ「東洋区」に属し、その影響を強く受けていることがあげられる。この線の北側はユーラシア大陸の北半分にあたる「旧北区」に属し、南北の両生類相の相違は日本と韓国の場合より大きく、共通種はわずか1種しかいない。ただし、韓国を含む東アジアに広く分布するアジアヒキガエルが宮古島だけに隔離的に分布することから、日韓の両生類相から琉球列島をまったく除外して考えることはできない。

それぞれの固有種を見れば、日本では列島の複雑な成り立ちを反映して、各地で種分化したアカガエル類や *Hynobius* 属のサンショウウオが多数知られている。また、東洋区と関係の深いアオガエル科が多いことも特徴的だ。イモリも日本固有種である。

一方韓国では、スズガエルやスタインガーヒキガエルといった旧北区の要素が強く見られる他、ジムグリガエルやプランシーガエルのような中国大陸との関係が深い種類も分布する。近年、DMZ 周辺にごく狭い分布を示すスウェオンアマガエルや、*Hynobius* 属のサンショウウオが次々と独立種となっているが、北米固有だったアメリカサンショウウオ科に属する *Korsenia koreana* が太平洋を挟んで隔離的に分布するのは注目に値する。

共通種では、日本では対馬にしかいないチョウセンヤマアカガエルや、釧路湿原だけにすむキタサンショウウオが、韓国内に広く分布する他、トノサマガエルは陸続きだった時代に日本に侵入し、固有種のダルマガエルとの勢力争いで分布を広げたという説もある。

さらに別種でも、アカとヤマアカと対置関係にあるようなチョウセンアカとチョウセンヤマアカといったアカガエル類、ハコネサンショウウオ属 2 種の関係も興味深い。

